

第6講:「元の理」の見立て・象徴論

こふき本に含まれる教理については、人間身の内における守護の説き分け、かしもの・かりもの、心のほこり、いんねん、かんろだい、つとめとさづけ、をびや許し、出直しなど多岐にわたる。こふき本をめぐるのは、教祖が高弟たちに作成を命じられていたが、たとえば山澤良助が提出したものをご覧になった際には、よいと仰せにならなかった。しかしながら、こふき本は天理教教理を理解するうえで重要であることに変わりはない。

こふき本の特徴について、『こふきの研究』(1957年)における中山正善2代真柱の指摘にあるように、年代が下るにつれて、こふき本の内容が増していく。こふき本は一つの写本から筆写されてきたことが推測されるため、「正冊」を探す作業が行われてきた。教理や見立てなどに関して、こふき本が徐々に“厚み”を増していく背景には、教祖がよいと仰せにならなかったからということがあるのではないとも考えられる。

日本文化における「見立て」

「見立て」という語は複数の意味をもつ。『デジタル大辞泉』によれば、①見て選び定めること。②病気を診断すること。③予測すること。④〈ア〉あるものを、それと似た別のもので示すこと、〈イ〉俳諧で、あるものを他になぞらえて句をつくること。⑤思いつき。⑥見送り、などの意味で使用されている。また、この語は『古事記』(712年)の神代記に見えるが、そこでは「その島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。」のように使用されている。

見立ての意義としては、表面上で与えられているものの背後にある一貫した意味を創造的想像を通して構成することにある。この点について、尼ヶ崎彬は隠喩という言葉との比較から、『見立て』とは対象を取り扱う主体の態度に注目した言葉⁽³⁾であることを指摘している。つまり、見立てとは、ある言葉がその内奥にあって指し示す意味を、その言葉を受け取った者がいかに解釈し理解するかという、主体側の意味理解の問題である。そのため、見立ては必ず「仕立て」(コンテキスト)を必要とする。

教語としての「見立て」

天理教における見立てについては、この語を誰がいつ使用しはじめたかは不明である。また、見立てとは、こふき本の本文で使用されたわけではなく、後代の信仰者がこふき本を理解するうえで、親神の守護が神仏等に見立てて説かれていることを示すために用いてきた語である。ただし、これまで指摘されてこなかったこととして、「見立て」の語は「おさしづ」のなかで使用されているという意味で、教語の一つと理解することができることである。

「おさしづ」で使用される「見立て」の語の意味としては、2つに大別することができるだろう。まず、「見て選び定めること」という意味については、「当分の処見立てゝ、三十日だけでも養いの心育てゝやってくれへ。」(「おさしづ」明治40年3月22日)という文中に見出すことができる。さらに、「あるものを似た別のもので示すこと」という意味については、「理と理と親子なるこのやしきへ入り込めば、年取りた者を親と見立てるよう。」(「おさしづ」明治22年10月14日)という仕方で用いられている。ここでは、血縁による親子関係ではなく、信仰の関係性に基づいて、おやしきでは年上の者を自らの親としてみなして通ることが説かれている。このように、年長者を親というかたちで捉え、行動していく際に見立てという語が用いられているのである。

見立てから説き分けへ

天理教内で長らく見立てと呼ばれてきたものを、裏守護の一部として捉えようとしたのが石崎正雄である。石崎が「裏守護」という語を用いる背景としては、諸井政一が『正文遺韻』において「うらのみちにつきてのはなし」(裏の道につきての話)と表現したことが挙げられる。すなわち、親神の十全の守護(表の道)に対する、神道・仏教・民間信仰などを通して示される守護(裏の道)という対比である。ただし、その際に生じてくる問いとしては、十全の守護のなかで取り上げられる神仏が示す守護は本来共通しているはずであるが、共通性を認めることができない際にいかに理解するかという点である。

そこで導入したいのが「説き分け」と「象徴」という視点である。「見立て」が親神の守護を仏教的・神道的コンテクストから理解するのに対して、「説き分け」は神道にまつわる神名や泥海中の動物を通して、親神の守護を象徴的に捉える理解である。ここで言う「象徴」とは、抽象的な事柄を具体的な事物や感覚的なことばで置き換えて表わすことである。また、見立てや裏守護が十柱の神名を神仏等に置換する視座である一方で、説き分けは親神の人間に対する十全の守護を神仏等を通して説くという視座である。その目的は、人間創造とかぐらづとめの結びつきを伝えることにある。

和歌体十四年本(山澤本)では、「とふねん巳の…」と年齢が記されるが、この点は十六年本以降には見られない。ここでは、当時、実在した8人が人間創造時に引き寄せられた十柱の神名に対応させるかたちで説明される。

このやあつにんげんたまひどふぐなり

これにみなへかみなをつけて

また、和歌体十四年本(堀内本)でも、引き寄せられた道具に神名を付けて表されている。

このどをぐもとのところへひきよせて

にんげんとなしこれにかみなを

これらのこふき本から理解できるのは、守護と神名の関係性について、親神の守護に対して神名が配されて説き分けられていることである。このとき、十柱の神名とは不可視である親神の十全の守護を具体的・可視的に表したものの、すなわち象徴と捉えることができるだろう。したがって、こふき本で示される神仏や動物は、親神の守護の多様で多相的な表れとして捉えることができるだけでなく、当時のコンテクストに沿って、分かりやすく重層的に説き示されたものと捉えなおすことが可能となる。

こふき本を読み解く視座を見立てから説き分けへ転換するとき、世界の多相性は「神のからだ」である親神の十全の守護へ収斂されていく。同時に、信仰者がそれぞれの置かれたコンテクストから教えを読み説いていく状況を創り出す。そのため、こふき本は私たちが生きる時代に教えを適用させ拡張させる機能を与えてくれる。「元の理」が絶えず開かれ、解釈の余地や余白を多く残しているということこそが、道の教えの豊かさにつながっているのである。

[註]

- (1)「見立て」(『デジタル大辞泉』 <https://kotobank.jp/word/%E8%A6%8B%E7%AB%8B%E3%81%A6-638383> 2025年9月24日アクセス)
- (2)次田真幸『古事記』(上)1977年、講談社学術文庫、40頁。
- (3)尼ヶ崎彬『日本のレトリック』花鳥社、2023年、32頁。
- (4)沢井勇一「和歌体十四年本「こふき話」の対照覚え—山沢本と堀内本—」『史料掛報』第121号、1967年、9頁。